基箋抄序

和哥ハよもすがらもよく心のまゝにのべき
よしを賢のさとしとところへいへんや
百人一首ハそのかの謹乃住撰まく
二条家の骨髄なれバ翁うる当代人農
よみやすきやうにおもむき井上氏秋雅生
祖父ハのしはね此百首を掻説ちくせ
ほの紀をまをおもひ令をわきまふこうし
きよ年忘りおひくもありけりを吸ある

了後授受乃遺書を見るに故二位殿の御物語を書きて伝ふ此物語を編集して帝に見せ奉るを以て此を以て
こゝ注解乃至味読するもの多くして
なるべし　うるはしくとゝのへきことを
さとりえんこゝ著心乃切なること和歌
歌道を歌道とし堪能なる人を撰ぶ
こゝを需めし意なるべし

九月廿七日　素行

百人一首増補絵抄凡例

題号　百人一首とは藤原定家卿の古今百人の歌の一首を撰び出し給ふ百人一首と号す百人一首とは百人の歌一首づつを以て小倉の山庄の障子紙の文字紙に書せ給ひしを百人一首と号す百人一首の歌は公卿貴族の作なれども百人一首の歌は定家卿の撰び給ふ歌なれば古今を通具有家定家家隆雅経の五人を作て撰び給ふ

作者多くは俊成（元久元年三月九日卒九十一）又一説八十九歳とも

古今の作者は世を治め民を教化の端とし給ふ故に歌道は人倫の教化の端とし給ふ故に歌道は人倫の教化の端とし給ふ故に歌道は人倫の教化の端とし給ふ

百首撰　山庄の障子に百人一首を撰び給ふ

絵　百人一首の絵は定家卿の子孫の為家の筆なり

抄　抄は絵の説明なり

井蛙抄云　俗説の説なり

作者　百人一首の作者は上古より末の世に至る迄百人の世代を撰び給ふ

撰者　撰者は定家卿の撰び給ふ

歌　歌は和歌なり

歌道　歌道は和歌の道なり

歌人　歌人は和歌を詠ずる人なり

歌学　歌学は和歌を学ぶ道なり

歌人の作法　歌人の作法は和歌を詠ずる作法なり

歌学の作法　歌学の作法は和歌を学ぶ作法なり

歌人の作法　歌人の作法は和歌を詠ずる作法なり

歌学の作法　歌学の作法は和歌を学ぶ作法なり

歌人の作法　歌人の作法は和歌を詠ずる作法なり

歌学の作法　歌学の作法は和歌を学ぶ作法なり

歌人の作法　歌人の作法は和歌を詠ずる作法なり

歌学の作法　歌学の作法は和歌を学ぶ作法なり

歌人の作法　歌人の作法は和歌を詠ずる作法なり

歌学の作法　歌学の作法は和歌を学ぶ作法なり

歌人の作法　歌人の作法は和歌を詠ずる作法なり

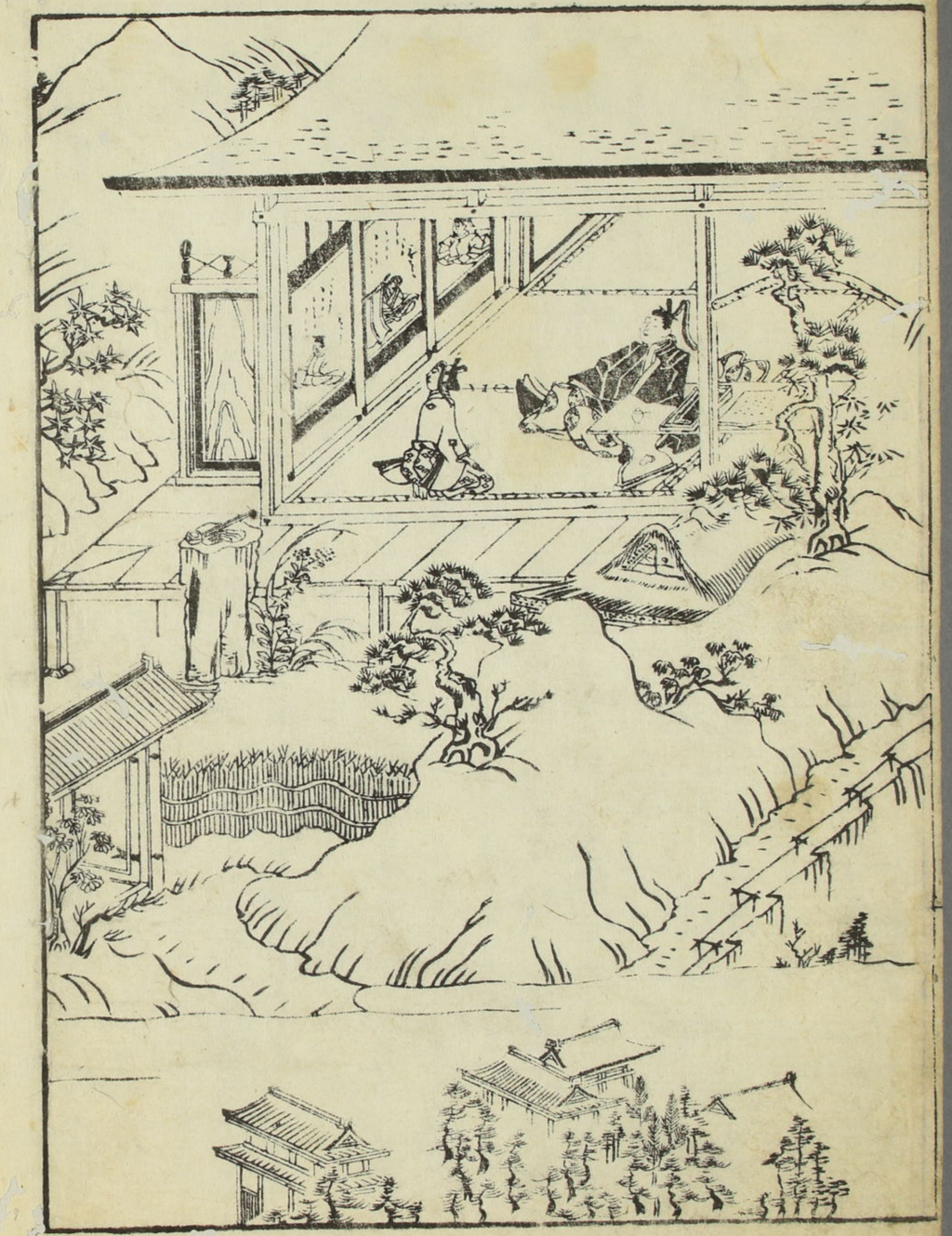
歌学の作法　歌学の作法は和歌を学ぶ作法なり

因りて云ふ。大家の骨髄とあれども、よくよく学ぶべき事なり。定家卿の時代和歌の
道世に行はれて、風俗悪しくなりぬる事をなげき給ひ、此百首を撰び後世に教へ
給ふ。孔子文武周公の道を継ぎ給へども、君師の位をえずして道の行はれざる事を嘆きて
春秋を作り、詩書をあらためて道を後代に教へ給へり。孔子の此書は儒道の世に行
はるゝ事わが朝までさかんなり。定家卿の此百首は和歌の道の世に行はるゝわが朝まで
黄門の在世には此百首を人あまねく知らざりしかれども、これは人の心に思ふ所に
かなふ故、此百首の作者は世にいまだしく、ものごとに又名ある人も多く
ぬも入らず、不審の事ありけり。先達も黄門の遺訓を云ふことをよく見給ひて一首を
定めて今に成りて大切の事なりて、此を教へ上手と世に心をこめて人の心をとゞめしも
名付けれども、此あはひ、くはしく用ひられぬ彰の詠作など稜辭のうちまかれども、結句雅
言をわざとつけて、そこに作のあり。惟ありて古今の名人の心ひとつにとゞめ
あれども此世にも思ひもつやくきまへねさる心ありき。さればこそ
さして卑下すべきことなれども、此作者あまたの時、殊月にく
とも異義三文まで盛し給へば、あはれ心ひさまはぬ古紀を挙
し道給ふとも身に色あれもさるまそ心へ人のやうかまはしくて人、作者
とはいふ古いろいろ、よく作り給ふ云ふ句編此百首に名ある作者もおほく
入らず、中にさかんで作者ともそるにも入られざる事はその作者の集

くはしく此ていうの首脳をいふものと学者あまたその心ありて世の人にもちひられは世にあり
ともしらざる人も批判あるもくらくすれども、仁のあるくたすく叶ふもの人なり
此百人一首に五十の大家又仁によりすわかる一首は人のうちに二首は新撰がらてる。三
首は仲丸の歌四首は思案がちに。五首は定家卿がらてし又一流の大家稲がらて思
皆撰ぜ給ふ所なり。撰者の古人の歌をいふすがたを作者のよりみ歌の
すがたもわきまへ知らずしてよみしさまかえらざるもまくくなり
熟して此歌の心をむさぼり、初学の人のあまた古説のあやまれることもあるのせざ
首脳をつけることも作り文ひとしくあれ比説くはわけぬれどもその講説
をさらむざるも作りてそれは当世の説よりもづきてもあやまらぬもの
きられどもなんなんともあれを弁歎にまれず入るまじゆへなり。作者の縁起又
百首のかたわらには読みの掛るに異せる事つきぬなし。ぬけ
ろゝその大首の本紀しもるも作り

百首所載之集

古今集	九五首	後撰集	五首
拾遺集	十一首	後拾遺集	十五首
金葉集	五首	詞花集	五首
千載集	十三首	新古今集	十五首



新勅撰集　四首

続後撰集　二首

定家卿ハ人王七十八代二条院応保二年ニ誕生したまふ元の名ハ季光。京極黄門と号し。治承元年ニ初名を改め給ふ。元久二年ニ新古今の撰者五人の内その第一人。此撰ハ元つゝ混雑して其つのよからぬを。故ニ帝も又これを悔らせ給ひ勅して貞永元年ニ新勅撰をえらバせ給ひ。天福二年ニ奏覧を撰述だが後鳥羽院の勅を受て八代集の秀逸をえらひ。堀川院の題をとけ得られし秀歌の大体を呈し征夷将軍のもとめに応じ来の秀歌をえらひ。家隆卿のもとめに和歌の庭訓などおもてる快秋詠歌の会に依て師弟の大概を記し。未来記を詠してね等をえらぶ。小倉山荘色紙の形。後世百人一首と号すもの是なり。古来風躰。桐火桶。三代集秘訣。源氏物語の奥入。伊勢物語の秘授抄。汗牛充棟あげそれぞれ人ふるもの。元久の比より住吉の社にまふでて冥慮を感じ。汝が月明らかなり乃三字をしめして是より神識洞然として、さうるおすあり。故に其を名付て明月記とも名付て其の遊藝ハ有識・冷紀・文学・叢発・詩賦・文辞ハ家の集を撰ひ拾遺愚草として筆記しかハ一定も残り、射戯・蹴鞠乃雑藝ハ好学のもとにぞ残されて後の世にあらはし。貞永元年十月十一日ニ出家し法名明静と号す。仁治二年八月廿日ニ卒去年八十歳なり

舒明天皇┬天智天皇┬持統天皇　天智ノ皇女　天武后
　　　　├天武天皇├元明天皇　女帝　天智ノ皇女
　　　　└皇極天皇　天智天王ノ母　女帝　斉明天王ト云
茅渟王─┘└孝徳天皇─有馬王子

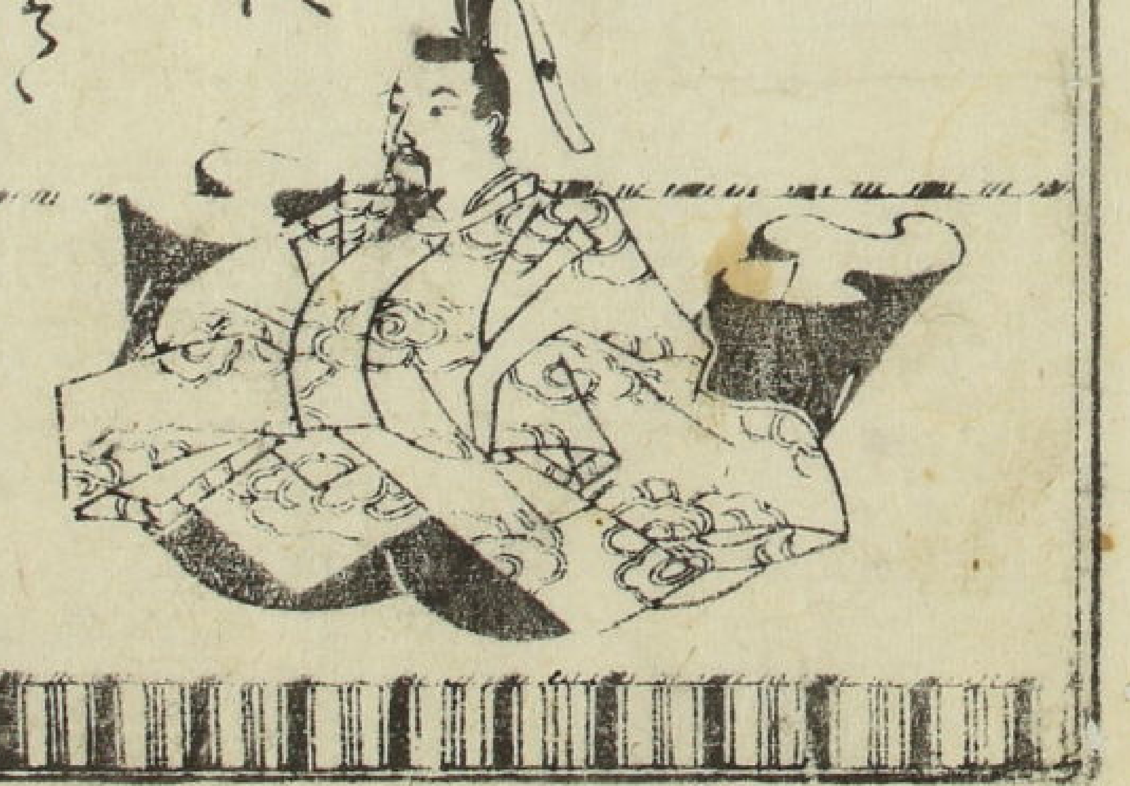
諱ハ葛城皇子と云。始ハ中大兄皇子とも開別皇子とも申す。舒明天皇の御子で御母ハ皇極天皇也。近江国大津宮志賀郡にうつし給ひ御在位十年。大化十年戊十二月三日崩御年五十或ハ四十六又ハ五十八とも云。日本紀ニ天智天皇ハ癸亥十二月乙丑朔日に崩すとも云。又一説ニ天王ハ山城国山科へ行幸まして御かくれ給ふ。其のありかしれずや。御沓ばかり残りたるよりて其沓を陵と定め今も山科の御陵と申す。十陵の第一也。又田原天皇とも近江帝とも申すなり

○ちんぜうにいはく、文字のおもてはかりにてよむべし

◆此歌、後撰集秋部に題しらずとあり。かりほの庵の苫とよめるに一説ハ仮庵の庵、一説ハ刈穂の庵と云。穂を刈てかりそめに作りたる庵の苫をあらみ。此歌を案ずるに一説に稲田を守る庵のあれたる事をよまれしなり。古今に鴫田のもりの庵にもおれハ露にぬれつゝあけぞしぬる。又調花集に田家月　新院御製　月きよみ田中にたてるかりほのかけもあらはれてありぬべし。我おほみ継かたの庵とこそあれと作れども穂の刈穂とかいふ。かくしかすがにかりほといふを略してかりほとよめる

天智天皇

秋乃田の
かりほの庵の
とまをあらみ
わか衣手ハ
露にぬれ
つゝ



すなはち昔のうへかりほの庵とまを申す。政務がなどにその收納しされども田つくりとのみにて御製の意は
難をわたさんがため御製の趣向にて秋もすゑになりぬれば苦しき年にも至りて、秋のふけゆく
なるとなん。されば此帝ハ仁心ふかくましまして飢饉の年にハ[illegible]されバ秋の
思の胸をいたましめ給ふ。百姓のうれへ民の辛苦をおぼしめして民の[illegible]
の辛苦をおぼしめし帝の御心の辛苦を民の[illegible]
つまぞ稼穡くるしき辛労するも労する事一段なれバ、みやこの[illegible]
秋にぬれたまひけれども民のこゝろをおぼしめしやられてのことなり[illegible]
ぬれさせたまふとおもへバ[illegible]
さる万民をあはれみたまふ[illegible]田夫の業の[illegible]
つくらせたまへる仁心おハしましけれ。為人君止於仁といへり。孟子曰。治人者食於人食人者
治於人といふ。宋の仁宗皇帝の毎尚二食案一稼穡功[illegible]
はみなりとの御製を作らしめ[illegible]性くそのゆゑに民のよを一段つよく思召さるゝにや。内
さしかはるかたの民の苦をつくるを御覧[illegible]
やうにおほしめすの[illegible]
あらうにおもひ[illegible]
仁大度の御歌なればなるべし
新千載
秋の田のかりほのいほのとまをあらみいとひもあへぬ麻衣 なる家
同
山田もるかりほの庵のなるこにも[illegible]ふきこす袂の夕風 為世
玉葉集百首
風さむき[illegible]ねざめのかりほのとま山田もる人 実雄

持統天皇　系圖天智天王の下にあり。女帝也。
諱ハ高天原廣野姫天皇と申す。天智天皇第二の皇女。御母ハ越智娘也。天武天皇の后にたゝせたまふ。草壁皇子の御母后也。大和の國高市の郡藤原の宮におハしまして御在位の年十一年。大宝二年十二月廿日に崩御したまふ。
● 持統[illegible]
▲ 此御歌ハ万葉集に春過て夏来るらし白妙の衣ほしたり天のかく山と有。新古今よりハ衣ほすてふとなりて[illegible]夏来の[illegible]天のかぐ山ハ大和国十市の郡にあり。香具山ともいふなり。八雲御抄に天の香具山ハあまくだりたるによりて天のといふ。日本紀の神代巻にも[illegible]
[illegible]
[illegible]二月[illegible]三月
[illegible]
[illegible]

あしひくしきれとも又くさわけつゝ。長すぎぬれど。寝もやらぬきんじ。山の峡にある
とおろへの尾はもとよりふかく長い。尾の長きよりかゝりぬ山よきかすてをぬるきうちめう
なれど。長きへの長き夜の長きによりふく。寝のこゝろをもそ此間詞とされど
まくらことハしとくふも夜さらにくしくしもらも用ゐらちて大切の詞とまとて又ある説にハ。
寝とかくしてよみたる言ん。長すぎ夜なきもなかれねど空穂山のかをこらるゝ点じく
見すしも。山ハ山鳥なれバ。いかにも寝の仲らへ隠れとして今日ハもや。前夜まで定家
の時説なれバ。もろや寝のこゝろとふいぬまじ。人のうゑもまた定家の白きひとへの衣
さらゆかれなれど。山もとハもろへの衣かと思ふべきこの物どもわかる。玄貞
此説ハ寝の玄妙して山の峡をまよりて寝の衣のあさんもそ白きの衣とし。又或人
の説ハ実ハ寝なれし定家の時説なれバ今日ハ寝の衣も玄ろへの衣かもとゝ
へきとくしいづれもすかしき説。只この人の思ひところよ志て寝の衣へ又ある説より夜の巻
以まへらゆへよ定家の存よそ。是非も夜に玄旨のハ説ハ君じまずぞまで第一二の句まで
首夜の寝をもとよりかられバ第三四句まで縁ハ不ず。鹿をれて玄の夕ゆへ気色かわれてゆり
たるへしとゝ又一説に云。むかしの山ハ昔神代に天照大神岩戸に引こもり給ひし時八百万の神
の神たちの山まをとよりそ神楽をなしに。大神岩戸をひらき玉ひ。人の顔まで白く見えしより
あしひきの天の下明白になりしと。よりて玄らへの心とふまむかも

新勅
冬来て　長い夜すがら　ねざめも　久かたの山よかげさえみてひく

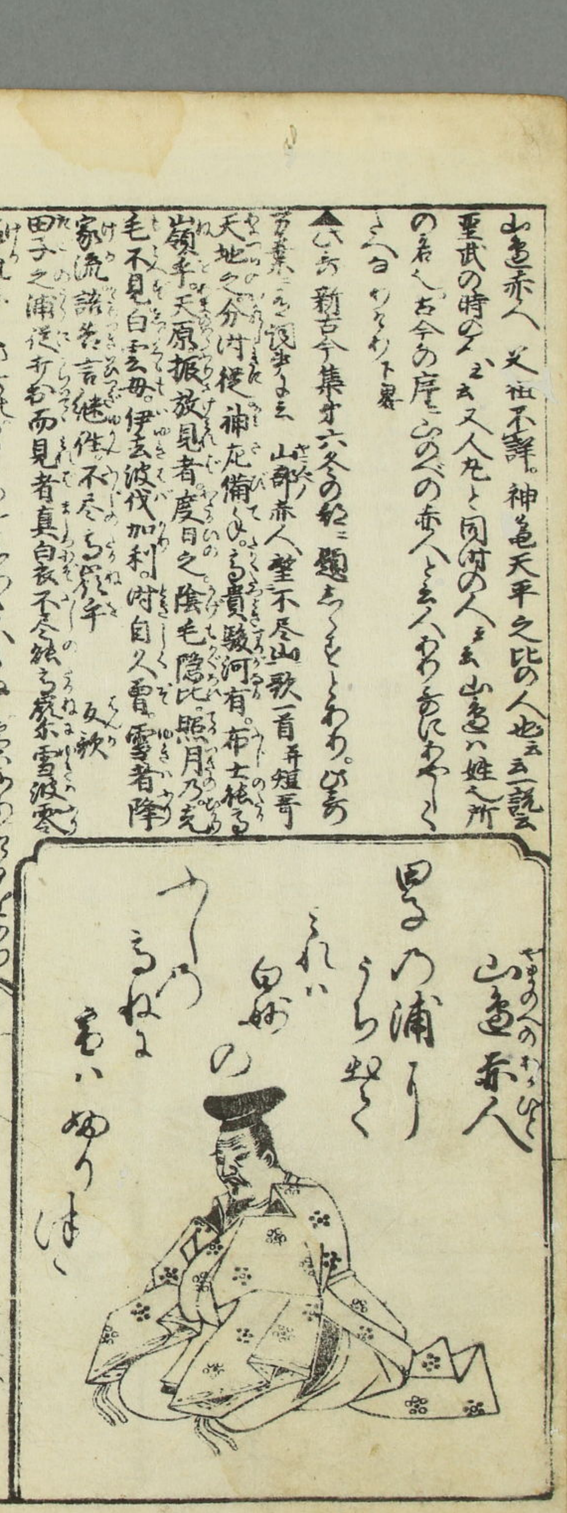
新古今
秋くとも　夜にほにそとし　わまのつく山かすまるみひく
人なれや　あらみ　ねざめさらのれさ人　夜きたりわと　さえて　ほしをあかす
おもへのこゝも山きかとゝまらしの雪もそゝろにねまのうく也　　　定家卿

柿本人麿　天智天皇の御時ノ人。家敷光の人丸
讃ニ云。大夫姓柿本名人丸。蓋上世之歌人也。仕持
統文武之聖朝。遇新田高市之皇子云云。猿丸曰。人
丸の忌日ハ秘して三月十八日をもちゐる云云
◎此哥拾遺集恋歌ニ。題しらずとあり。五文字の
あしびきとハ山をいはんまくら詞也。古歌の説々多し
只山を足曳と云なり。文字の道しるべにハこれを。古日本紀
足引ハ膝の形のことし云云。をしてこれも山に
山鳥ハ雄雌とわかれて山を隔てぬる物なれバ。夜ぞぶくし
それよりしてしだり尾のながながしといはんとて
ありて。あとさまかくかく長き夜をいはんとてそ
夜の長きを独ぬると云ハるき。人ハ物をやおもひけん　人丸
郭公なくや五月のみじか夜もひとりしぬれバあかしかねつ　同
おもふに時ハ益盛観不浅也。夜の秋の物おもひすれバあかしかね
だたし独ハさびしきを。なげきのまゝ恨や秋の夜のなが夜を独まず
ひとりねの恨。無言の歌の物思。三音云此哥詞のつゞき妙にして
情をふかくしてあはれと云。眼をつけて吟じてまた味をこゝろ
ろくし人丸のまさに情こそ半としてあはれ。気のつゞき
ろうけ人の其心の深く。古今の人に独歩なりとしての
たつ所も此うたにや

山邊赤人　父祖不詳。神亀天平之比の人也。一説云
聖武の時の人。又人丸と同時の人。山邊は姓。所
の名。古今の序にこのべの赤人と云人あり。あとにあらく
と云。

▲此新古今集第六冬の部に題しらずとよみあり。此歌
万葉にこれを載せり。山部赤人望不尽山歌一首并短哥
天地の分れし時神代備ひ。高貴駿河有。布士嶺を
嶺平天原振放見者度日之陰毛隠比照月乃光
毛不見白雲毛母。伊去波伐加利。時自久雪者降
家流。諸人言絶。不尽高嶺平
田子之浦従打出而見者真白衣不尽嶺に雪波零
家流。

又歌
つくしの海に舟をうかべ八島をさして
よ帝氣こゆれとも云説あり。不可信。此の歌の
わらきこ入船よりて西のうみ世こうあ
の鄙にて西の方にこれ船をかくるにて公河なるべ
あとねの浦とよめるは入て海の面白きうらなり
なのかなりとも河よりもうるとて
とよめるとも



右傳云官姓時代等不知。又云或説曰用
明天皇聖徳太子山背大兄王弓削王猿丸大夫
説長歌の方丈記云近江國田上三猿丸太夫より四位
なり

▲此所古今集秋上に人丸とあれども此所の
詞を見てしらるるきこえもし。猿の天ハ
うるはしき詞。猿のよそうるはしき。秋のうらわくし。
ふるてうるはしき詞を。ちるうらうとそ文字
わく秋の心と云ていうれへとちるうれ。花秋ハ和も
びしき和なるに。秋のうらもて。お染ふるる麻
のかくはかりてなきとん。貞徳云ゼトハ
眼と知て見るべしきこのひて可見あべ秋ハ
よ中ともかくこうとなわ。紅葉のさうとなるうは
しさちらくは地まわ詞とし。又云玄賞僧正曰秋
の秋なわ。ふこうく人まきはべるどそれば餘情
とるきこと。何れの先達の注ハ月やわるぬ
なわとうれ。

猿丸

ふるさとは月こそ秋ふるまふ
ふるくも庵のそうくあるる
いつれとも

天平元年己巳生。安丸孫。旅人子ト云。大伴宿祢
安麿 大納言贈従三位 大伴宿祢旅人 大納言従二位 家持 八雲
御抄曰、万葉の作者多けれども家持人丸赤人
などを棟梁とせり

△此哥新古今集第六冬部にあり。家持集にハ
秋の歌にかけるなり。かささぎの橋ハ七夕交会に。鵲
烏鵲(うじやく)と云がわたして、羽をならべて天河に橋を
掛るとなりと云。故に天河をかささぎのはしと
云へるなり。それを爰に取てハ此七夕交会の義にはあらず。
唯天河をさして云はれたると心得べし。霜の白きを
いふハ霜気と霜と云なりて夜の経るをしらしむる
どもいふ也。霜を置る天と云ことまでを記ねたるなり。
玄旨法印ノ曰、古代ハ霜満天と云事ナシ。家持ノ閑夜(かんや)に
起出て月もなくさえたる天に向て、吟じ出せる
なり。霜の天にみちたるにて眼前にわたる霜
わたせる晴夜の空を天さかなる霜のみちたると見たる
なるべし。此義御説をとらず。家紙に冬ふかく月も
なく寒さしたる夜。霜は天にみちて冴くる
深夜などに起出て、此ことをいひて餘情かぎりなき
歌なり云々

中納言家持

鵲のわたせる橋におく霜のしろきを見れば夜ぞふけにける

中務大輔船守ノ子也。元明天皇和銅元年生ト云
元正天皇御宇霊亀二年八月ニ遣唐使大伴山守
ニ同船シテ十六才ニテ入唐セリ。サテ唐ニテモノマナビ
シテ才智高クキコヘリテ。姓名ヲ改朝衡トナリ。唐帝
其才ヲ愛シテ。官ヲ授ヽメテ秘書監ニイタリ。カサ
ネテ検校ニウツリ。左補闕ヲヘタリ。カクテ年
久シクアリテ日本ニカヘリケルニ聖武天皇ノ天平
勝宝五年ニ又遣唐太使ノミコトノリヲウケタヽ
ワリ再唐ニシモムケリ。是唐ノ玄宗ノ天宝二年
也。栄雅ノ古今ノ説ニ仲丸ハ唐ノ大暦五年ニ
卒ス。日本光仁天皇宝亀元年ニアタレリ。時七
十九才ト云。続日本紀卅五曰。光仁天皇宝亀十
年五月丙寅前学生阿倍仲麻呂在唐而亡。家口偏
乏葬礼有闕。勅賜東絁一百疋白綿三百屯ト云。是栄
雅ノ説ニ十年ノカワリアリ

△此哥古今集羈旅部にあり。詞書にもろこしにて
月を見てよみけると云。此哥ハむかし仲丸を
もろこしに物ならはしにつかはしたりけるに。あまたの年を
へてえかへりまうでこざりけれハ。此国より又使まかりいたりけるに
たぐひてまうできなんとて出たちけるに。明州と

安倍仲麿

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも

云ふは海を見てかの国の人むかしのこゝろしけしをわすれざるなりて月のいとおもしろくさしいで
たるを見てよめるとかんなわすれたるとぞ見えてひ海をながめし時。王維包佶(ワウイハウキツ)
などいふ餞おくりの詩作りし時 こよひのあそび土佐日記に云。昔安倍仲丸と云ける人は唐土に
わたりて久しくわたりし時よ。舟にのるべき所にてかの国の人むかしのおくりしそうし
このうたを作りしなり。わすれずやわりなん其の夜の月出るまでぞありける。さて
仲丸のおもし。わが国にはかゝる歌なん神代よりかみもよみ給ひ今は上中下の人もよみけれ
ばとひもわがうたをもかの国人にしらすとてよみける
わが国にかゝる歌をよみければ[illegible]三笠の山に出し月なりと云万葉
集には蒼海原とあり。古今集には天原とあり[illegible]
万葉集には振放見(フリサケミ)と[illegible]。其の心は仲丸久しく長安の都
にありて四方[illegible]
唐土の山より出る月を[illegible]
[illegible]
のをかしきこゝろにうつして[illegible]三笠の山より出し月とおもひ
[illegible]。其の本は[illegible]
今更に[illegible]天の原ふりさけみれば[illegible]
いはんや[illegible]
[illegible]三笠の山にいでし月かもとよみけるなり

喜撰 一本ニ橘ノ奈良丸ノ子トモ云一本ニ刑ア々名ヲ虎朝臣ノ
息トモ云共ニ非ナリ系圖等ニ無所見一説ニ山城國乙訓郡
人也トモ云是又不知云宇治山隠倡遺跡御室戸ニアリ
作和哥式ヲ称名院ノ説ニ基泉ト云人アリ和哥式ヲ作也
同人カトモ云一説ニ同人トモ云又別人トモ云鴨長明無名抄ニ云
三室戸ノ奥ニ二十余町ハカリ山中ヘ入テ宇治山ノ喜撰ガ
住ケルアトアリ家ハナケレド石ズヱナドノサダカニ侍ルコレヲ
タヅネテ可見云云

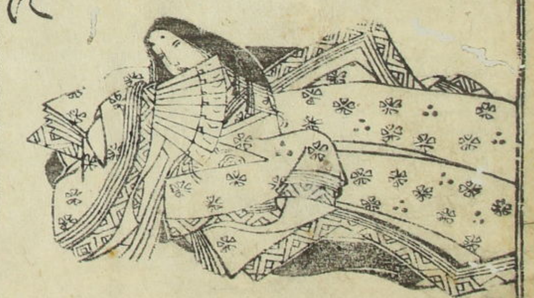
○法師 [illegible]

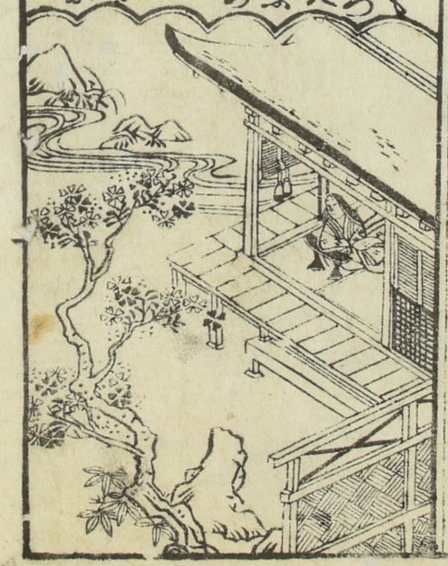
今古今集雑下にいれられたり。喜撰世をのがれてうぢ山に
[illegible]

喜撰法師(きせんほうし)

わが庵は
みやこの
たつみ
しかぞ
すむ
世を
うぢ山と
人は
いふなり

小野小町 出羽郡司小野良實女又三説に出羽郡司小野當澄女帝澄とも或説に出羽郡
司小野良實女又三説に仁明時采女とも
古今集才二番に小野小町家集に出羽郡司
と添へ書あり是を首日ぶるに表紙の裏に
花のさかりはあだ心なりと書とあり
るをけくそこやうにかなれてこしろ花
しぶるかのよりかなしく為てるこ裏の
ふくもまれしかるさの歌花のかりへくるそ
多もくるかわてこそあるとしてもいとる
貞淑な小町家集よ花とをかわてあれ
ろしこ結わてもに花をよりひてあるとか
ぶ多の係よ出為とを人て可又をあ民の
ふるわのつぐきしるのつくしに色それ
徒のてんに宮淫は徒八空世とわれだ
義旬の死八文の花ホーて。世為は稲のうを歌し。
徒よ世るふる程はおるくるとと花のるつ
ろ和と歌るる稼よ名わるとをして感歌ふくすく
のをハ。をもくく稲にるわが我身のなるもなて徒は世ふ
ちろよ。おるてる花のち為せしまふるりしるふひ
ろるふひ。を為を引しをて感しるるくぶのにあをを
新古 いるふをえ世にるるかるる紫のるるるる花の去れ
月 さくら花をのを去をにるわるをもるる徒せ
伝撰 まるして徒為ふるる徒ふ人のぶの花をいるりを





蝉丸 二説に逢坂関守説世く盲目とも説く拾撰とも詞花とも百人一首にも撰ばれたるの
詞花とも百人一首とも世に盲目なりとも又世に延喜の皇子とも説く
或説に或人の申ハ古き物に今坂の翁と申り俗に或ハ
童或法師とも。ふるしハ何も為遠なり
▲此歌撰才十五雅に詞花集に蝉丸を
作るとそ俗伝るなれ作るふ人と見てもあるそ所つて
とあり。此和歌ハ京わ田会しの人も田会しの歌人に
ろ人も皆此関とゆるされハ往還のしるとさされハ歌
よりそく歌人とわれ。田会しの歌人より多を。
皆此者しとよわれ。此者ハ盲目なれハ浮世に生
ろうと今を過ぎ世をさわて死をろ人とわるくす。世
上の。生死異域のみ絶なれハ逢坂の関よ為遠と
歌会して。をやハ生死の道とひとしく逢坂関の人も
おるくるかるとすと。逢坂の人も為遠と以て生死
を合をろ。をやハとしるくむ文言所為しくく
べし。去盲日。面ハ旅喜の世界のさ為かるあく下の心い
合者宮雅の心くしくく 蝉丸詞曰
世ハ
逢坂のるくしの風さしられとも人をねもひてをめる
風のくんよあるるをるねちわの男ハ彩安もをひをを
三首のをくこハ蝉丸ハ。ろををとをハ作者をわの
さ。ほ撰をハ作者を出とくるとを

参議篁　姓小野　参議左大弁　号野相公

敏達天皇　春日皇子　妹子毛人

毛野　永見　峯守

敏達　道風

篁　保衡

好古

篁ハ破軍星の化身し

官ハ文章生弾正少忠大内記蔵人式部丞右宰少貳春宮学士弾正少弼義仙守

△篁ハ古今集歌撰　張紙何ぞよ　おきの函

へなりこれるのことなり。ゆえ書て必ずしも

本なるべきかりこと侍るべし。栄和元年

野篁配流す。仁明天皇承和五年遣唐使任ぜ

れるの。一の船よりのこれハわるかりしきこと

ちなりと。水漂之承和五年十二月ハ小野篁

の乗へ船ひ。つのりき。あと唐へ渡らんとせしに

男に病付るうち。年。よりまさりしよりあるを

うへつるうるの文の紙のつ。ふひらきれて。世のあれ

るあるとかいとなるとこの法皇はいらべしてたい

ゆえ。流つのをもとひしなわ　先表青の船

和田の小八十島
こぎ出ぬと
人にはつげよ
あまの釣舟

流しこのりのを作りて遣唐の役をそ一度甚河が浪くい尽諱を犯をそ有るべし。敏達天皇雅紀水

漂去青の流罪あり。それ。四流しとなるべし。番面東ハ海の隠岐ハ八十島ハ八十島不服負れ流

とを。神中抄十九。弘明日。やそ島とそ。ものの様わり。ハ。ものあるべきまこと。ものあり。一ハ

八十島。それハ一ハ。と。ものあるべきこの島をとをべ。ものハ小豆島。ものあ隠岐国へ流されるべ。

ものとして。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。

流罪ものあるべ。九流刑ハ罷の種類にわて。を流中海道流とそ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。

一へわれ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。

ハ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。

公法の法とものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。

を罷ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。

ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。

ものあるべ海上のものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。

今一ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。

てて。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。

人ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。

といふものあるべ。

債権捨　ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。

方量　ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。

古今　おきの国へ流されて侍るべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。

わりしきやひのものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。ものあるべ。

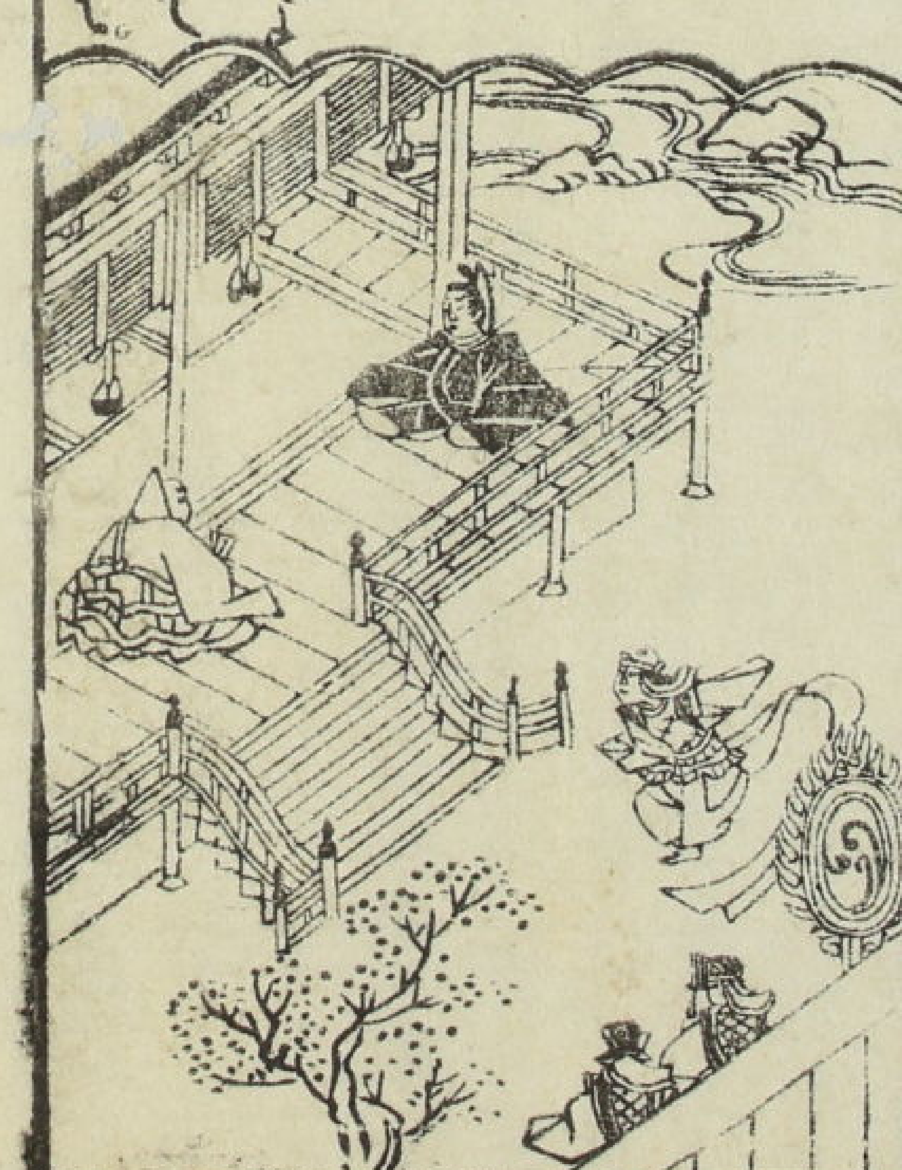
小野篁

僧正遍昭　俗名良峯宗貞、号花山僧正、又号良僧正ト。釈遍昭ハ門下侍郎安世ノ男也。早ク羽林ニノボリ、殊更仁明帝ノ近侍ニ寵遇日ニ渥シ。嘉祥三年三月上帝崩ジ玉フ。又哀慕ニ不堪、叡山ニ登リ剃髪ス。猶元亨釈書ニ詳也。太和物語ニモ此趣アリ。嵯峨ノ天皇ノ后ニ浮名立ケル故ニ出家スト云説非ナルカ。寛平二年正月十九日滅ス　七十五才

桓武天皇
- 平城天皇
- 嵯峨天皇 ─ 仁明天皇
- 淳和天皇
- 良峯 ─ 安世 大納言 ─ 宗貞 左中弁正四位下又左中将 安世ノ子男 法名遍昭 ─ 素性 雲林院別当 俗名玄利／由信

延暦二十年賜良峯

△古今集第十七雑上、詞書に五節の舞姫を見てよめるとあり。されバその舞姫を天女のあまくだりしに見なして、よめるなり。天女ハ空より天下する物なれバ、



乙女のかよふ雲路をしばし吹とぢよと天津風に下知したる心也。雲の通路吹とぢられば、暫く留るともあらんと也。五節の舞の面影をしたひ賞くべし。貞徳云、しばしといふにて、なほあかずしくとゞめまほしき也。それハ舞の姿をしばしとゞめたきと云。前に五節の事、日本紀にも不載。公事根源月令等にあり。毎年十一月にあるなり。大嘗会の時ハかならずあるなれど。清御原天皇、吉野の瀧の宮にまし〳〵ける時、日のくれ方に琴を弾じて御心を澄しおはしけるに、向の山の峯より、あやしき雲たちのぼりて、其雲の中に神女の姿あらはれて、御琴のしらべに合せて舞ひけるを、御門ハ御らんじけれど、外の人ハしらざりけり。其神女袖をひるがへす事五たびに及びたり。これよりて五節とぞ名づけ給ふ。其ほか附会の説多く、乙女の数も五人にさだめ、是をうつしておこなはれしとぞ。舞姫ハ公卿殿上人の女を召されて、其ほか受領の女も出しけるとなん。楽を奏する事ハ、玄宗音律を好み給ひ、みづから人に教へければ、其道をむねとしたる事久しく、霓裳羽衣の曲と名づけて、楊貴妃にまはせられし故事に似たり。

古今　いかなれバよそにみえけん[illegible]ひとめの床をたのみしとぞめん

浅香羽院遠忌に乃此の歌

天津風ふきとぢよと見バ雲もちりと[illegible]雲のかよひぢ

宗祇云、遍昭の雲のかよひぢハ[illegible]天津乙女の雲路をさへ[illegible]舞姫を御覧じけるにやとぞおもひくらべて[illegible]

陽成院 諱ハ貞明 清和天皇第一の御子 御母后ハ皇太后藤原高子 号二条后 貞観十年十二月十六日降誕。天暦三年九月九日崩 在位八年 御年八十一 帝ヲ二条院ト号スルハ院ニテ下リ玉ヒテ此院ニ坐セシ故也

〽後撰集十一恋三。釣殿のみこにつかはしける。[illegible]
[illegible]
[illegible]
つくばねの峰より落るみなの川ハ[illegible]
一滴づゝ流れて末ハ河となれり。すべて序歌也。
此歌の心ハ大略此ごとし。[illegible]
天子の御身にてハおのづから[illegible]
[illegible]
[illegible]

泯江初濫觴 入楚則無底
千里始足下 高山起一塵 白楽天

[illegible]天川[illegible]

陽成院

つくはねの
みねよりおつる
みなの川
こひそつもりて
ふちとなりぬる

源融 嵯峨第十二源氏 母正四位下大原全子 於六条河原院摸塩竈浦

嵯峨天皇─仁明天皇
　　　　└源融 左大臣従一位 号河原院

〽古今集十四恋四。[illegible]
袖中抄に顕昭曰。しのぶもぢずりとは陸奥の信夫郡より[illegible]
陸奥信夫郡に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
乱れそめにし[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
みちのくの[illegible]

河原左大臣

みちのくの
しのふ
もちすり
たれゆへに
みたれ
そめにし
我ならなくに

光孝天皇　諱ハ時康　号小松帝
仁明才三ノ皇子　母ハ藤原沢子。贈太政大臣総継ノ女　在位三年
仁明天皇―文徳天皇　田村帝
　　　　└宗康親王
　　　　　光孝天皇
天長七年庚戌降誕。仁和三年八月廿六日崩御　五十八才　九月三日葬小松山陵
甚和歌を好給ふ故。光孝の世人皆和歌にこゝろをよせしとなむいふ

古今集才一春上。詞書に。仁和のみかと親王におましましける時に。人にわかなたまひける御うた。仁和のみかとハ光孝の御事也。毫恵云詞書のおもむき文字のまゝにて心得へし。しかれとも今少しくはしく申さハ。此哥ハ君か為とハ人をさして詠給ふ也。若菜ハ春の初に人の為に菜を服すれハ万病を除くと云事也。七種の菜を供する事ハ延喜の御時より始まる。人の為に是を服して万病をのそく事をいのり給ふ也。七種の菜ハ荊楚歳時記大宗紀

なと云物にあり。七種とハ或書に芹五形なつなこほとけのさはらへら。すゝな。すゝしろ。是を七種とハ云也。

又ハ芹なつな五行たひらこ仏の座あしなみすゝなすゝしろ是そ七くさと云。毫恵云。仁和ノ帝ハ位につかせ給ハさりし時より。御うつくしきよし。御心のやさしき御事也。若菜の心ハ春の初めに菜を摘む事也。かくいとやさしく尊き御心なり。御位ハ継体のうちにおましまさゝりしを。時康親王のうちに。上一人より下万民に至るまて。御徳を仰き奉りて。位につけ奉りしと也。然れハ天下を治め給ふ事。御仁徳の故なり。家宗国ハわけてもあつくし奉る事。儒家にハ尭舜を以て聖の帝とす。御心のやさしき事かくのことし。然れハ其人数入る事ハ。御勅撰なとの心闕き竟恵曰孝経に天子の章に帝王の御徳を載たり。然して民にあはれふへしとあり。仁徳のみかとの仁政を以て政を行ひ給ふ。心をよくわきまへ見るへし。天子の御心をしらしめす事也。しかれハ春の野に出てつみ給ふとあれハとて。まことに自ら若菜を摘給ふにあらす。是をもて万民に及ほし給ふ御心也。
ことにハ春の野に出てわかなをつむとよみ給ひしハ。ひとの為に春をむかへて。みつから野に出て。わかなをつむことの御心をしめし給ふ。又古今和歌集の序に。春の花のにほひすくなくして。むなしき名のみ秋の夜の長きをかこてれハ。かつは人の耳におそれ。かつは歌の心にはちおもへと。たなひく雲のたちゐ。なく鹿のおきふしハ。とあり。
かくてこそ心もことハりなけれ
うかひたるのひとつ
かゝるさまわれらし宿の菓乃春も君かためにまうけハ作らせ
月抄　ふかみにかねハひろき庭にかいつる春をつくらむ。むかしもむかふてちかふるらんかたへ
又くちには梅の花れさるをおなる紙おりく。二花ひらくに女の手にてらくかなり
雪ハ衣のうへをそ絵ぬらしつゝ春の野におりたつ袖つゝむわかなそ
かくしあるも皆こゝろをつくる事ハあはれを見せしの例わすれかたくそへ
かし

行平
桓武天皇――平城天皇――阿保親王――在原氏号納言
大江音人
在原行平　中納言従四位下左兵衛督　仁和三年　数仕配流
在原守平
在原業平
在原仲平

▲古今集才八雑部に業平は歌不和とあり。扨平国情の守なりし程に歌よろしからぬよし。ものがたりにつくりたるとも。又はそれをもつくりたるとも。然れども業平の続は漢別の編集なれば国情の歌のみなり。されば漢別にて松をあるかなれもとあるもしるべし。心ある人はいかでかこのこゝろをもしらざるべし。此ハまた漢別又龍田の続のごとく漢別の編集なれば。此のそばに。此の歌ハ立わかれあるかなの歌のごとくにて松を約として。男女生るまつとしきりハしらしよりしるべし。約人ごとあるべしやそ。ゆうこんのごとくにこゝろハ約人もわるべしとの義なり。三日不見如胡越と云ふ詩よりいでたるなるべし。ものゝ見えざるをもしるべしとなり。後歳をかの句まくあまをよそにしるなりとなり。

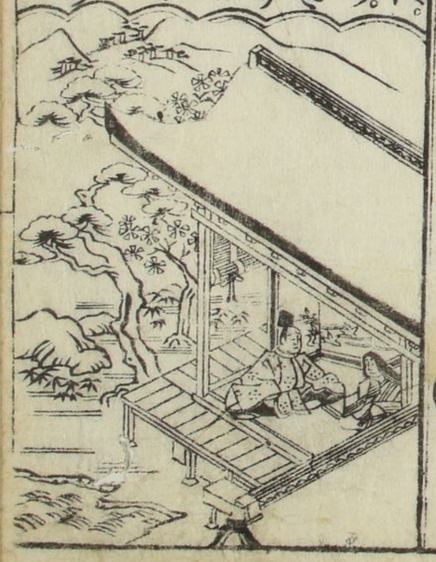
在原業平　業図行平ノ下ニ見
平城天皇第三子の阿保親王ノ子也。母ハ伊豆内親王ト云。桓武天皇第八ノ皇女也。阿保親王ノ五男三ノ在原氏ナレハ在五中将トモ云。天長二年八月七日ニ誕生メ。元慶四年五月廿八日卒歳五十六

▲古今集才五秋下。詞云ふ二条の后ゝ東宮のみやすどころとゝ申しける時に。屏風に立田川よりながれの流れたるを。紅葉の流れたるを。

ちはやふる神代もきかず竜田川
からくれなゐに水くくるとは

残賊強暴とうもわ。又ハ千早振千女破なるとも云。神とかくハまつる詞。あるいハ名を井蓮院の四位より潜通のかたわらとも云。

玄旨法印の云。紅葉の立田川よりはまつりくちわきとのことをいひそやうなれば神代ハ奇妙のすわれどもとくのごとくなれるはいかゝとなり。神代ハ日なりもきくとも。たれも大唐もしやめとなり。なるべきの女女御をかくのごとくいはゝ。家紙を秋ハ紅葉又ハ神名月なるべし。あがれもせきわなぬまくちはしりけるなるべし。あハくれ春ノとくちやうなるとも



公長ハ祇代ともく哥ゟいせ物がたりゟ引ハ
くるぬと公家ハ哥ゟけくゟ不なくれハ大せ
ゟ紙ゟも入られ又祇哥の大概の秀哥の内ゟ
一首祇哥ハ大概のもしひさとゟるべし。公哥ハ
ゟくゟ哥ゟ不ゟまゟで。ゟくゟ門の所ゟ
なるべしゟゟ遊仙窟ゟ云。妾ゟ妾ゟ嬌ゟ鶯乱於錦校非古非今花艶躍於銀池
云云公文法公哥の作家ゟ似ゟゟ人ハ云云鈴田川。古今ゟい三ゟ哥の山れゟ
ゟゟ哥ゟくゟゟゟ。ゟ撰ゟ人ゟ女のゟゟ
祇代ゟゟゟゟゟゟ。ゟゟゟ死ゟゟの
ゟ四ひゟゟゟゟ哥ゟれゟれゟゟゟ祇代ゟきゟゟゟゟゟゟ
ゟゟゟゟゟゟ

伊勢　前太和守従五位上藤原継蔭女　継蔭見伊勢守故為女之名

内麿　真夏　日野家元祖

濱雄　従五位下民部少輔

家宗　三木夏年

関雄　治部少輔号東山進士　京都作者

継蔭　大和伊勢守

女子　伊勢

伊勢物語の作者と宣旨法皇三代近く宮仕して行明親王を生り。源氏大和物語ニイセノコトヲ女ハトヲ心ヒトシ

▲新古今集才十一恋五の一部ちくさ　とわりぬ為の雑きわりの歌のまりしちつ物をつくしの名りと云物の雑と云字を五名。昭　名をとるるし。

しそしてやとパ名をやさうく　わりと云名。玄旨云。五文字よ君ハわわ。長の長の五文字。ひと名ものそ　詮ちるし

ふ物を上きそ。ハ今までつりをいをとそ。くわ

わ。の。の。ハ。く。ぐ。わ。り。く。で。よ。や。わ。ひ。て。ま。せ。の

きるこの部。と。ま。ち。ち。ひ。を。五。字。長。ま。ま。ま。ま。

ぬ。く。人。も。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

人。新。く。ま。れ。と。て。年。月。と。ま。ま。ば。ハ。ま。ま。ま。ま。ま。

わ。ま。わ。て。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

ぬ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

元良親王　陽成院才一ノ位ノ三品兵部卿　母主殿頭敦実長女　天慶二年七月九三日薨　五十四歳

神皇正統記云皇子ノ親王ト云コト四十二代文武天皇ノ比時ヨリ始ル

▲後撰集才十三恋五詞書よ。ことしでそそ恋よ

京極のは息わよ。ほ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

ま。の。ま。を。不。時平公女　ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

ま。て。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

ひ。の。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

ま。ま

俗名玄利又ハ儀時ト云系圖見遍昭之下ニ遍昭ノモトヘ行タレハ法師ノ子ハ法師コソヨケレーチ法師ニシモヲヨコ大和物語ニアリ

◆古今集才十四卷ニ四ノ歌ニ

ぬの風とまち出る山一夜のあらしをとわの空

今こそは人ならぬ物ハ秋の神わちぎりの玉ぐし

と秋ハ

遠うとも山の秋の中ゝもきゝ分ぬ人なわくゝ分ぬ

とも

ぬらぎちゝ人ハ秋をきゝそ分ぬ

風とはいかゝ知ゝ

ひゝ

ゝ

飾磨

西極ゝ

みゝ風のわれく

ゝ

西ゝけの

ゝ

の

ゝ

ゝ

ゝ

伊豫守正五位下或従五位下内蔵頭

平城天皇―阿保親王―
大江音人―千古
在原業平　千里　立男

▲古今集秋上。詞書よ。是貞のみこの。家の歌合のうたとあり。云旨曰月は陽の気なれば。つねよりの和をうく。月は陽の気なれば。うち縁るもの。なにもまさるものなし。ちぐまのこそ。くさむらぐらとは。ちぐまのこそ。くさむらぐらとは。もくぎわしなくくる。くれとは云なり。是千文選のうちにしるせり。つぎに同じく下の句は秋は天下万民の秋にて。ひとりとされ。一身のやうにあるべしと。

燕子楼中霜月夜　秋来只為一人長
大底四時心惣苦　就中腸断是秋天

菅原相公西府三月九月十三夜の詩の結句に

随見随聞皆惨慄　此秋独作我身秋

月はなにもちがふものなれども。秋のひとりのみとなるは。ちぐまのこそ。くさむらぐらとは。月は陽のうたなれば。

歌家　右大臣　正三位右大将　従太政大臣正一位

天照大神第二子忍穂耳尊。土師連小祖天穂日命十四世孫野見宿禰。垂仁天皇御宇賜土師臣姓。三世孫身臣仁徳天皇御世改賜土師連姓。十一世孫古人。天平元年六月九日改賜菅原姓

天穂日命―宇遅―古人
清公―是善―菅家

今の小野の天神。巨儒にして詩文に達し。ことに和歌よく。元和元年。清涼の使者来る。菅儒にまた使者右大臣の詩を称して風雅白楽天と仰ぐ。和漢集に菅大臣。ことに秋の歌多し。

久方の月の桂も秋なれば家の風にやまづ聞ゆらん

▲古今集羇旅歌。詞書に朱雀院なりける時。もみぢ山をよみたりける。是は宮の御屏風の中にしるべき歌の詞なり。

ちはやぶる神の御代にも聞かずたつたの川の水くくるとは

はるのまふとゝ云ふ心ハ山ゝとびいとりの人ゝを作なまのわうれんバぬゝもとわゝぬゝさんで
山ゝのおゝのゝきをさるゝ神よゝ面なるゝ面なるゝ面なる

貞信公忠平　小一条太政大臣

冬嗣―良房―基経―忠平　封禄濃国貞信公賜五百戸　摂政関白又号小条太政大臣

▲拾遺集才十七雑秋部。詞書は亭子院大井川に御幸ありし紅葉もながれてとかいふ。ことのはは。

たつたの川にもみぢ葉ながれてとかいふ。天なるの川紅葉とは。院の御幸

とかいふなるは。詞書は。亭子院の御幸

ハ。ちはやぶる。神の。いみきこそ。聞かめ。今ぞしる。天なるの紅葉を。

ぬさとなりけり。

貞信公

小倉山峰たちかへれ
みちなかば
心もとなく
ふきまよふ
こがらしの
みねのもみぢ
ばなりけり

中納言兼輔　左中将利基男号堤中納言

左右衛門督従三位

系図三条右大臣ノ下ニ見タリ　兼平三年薨　年七十

▲新古今集才十一恋部。恋ハ不知とかいふ。みちの

の不泉河。ちはやぶる。宮川。城山。おほ井川。みちの国

不の泉河。宮のえんを。源て。流るとは。さて。泉

川。みちのくにかは。序歌。この。恋ハ。吉野川。

不逢恋とは。未逢恋。この。恋ハ。なにわ。ふく。

やうの。人の。今ハ。絶て。なく。なにわ。なるを。

行ふやまと。恋。ゆえ。ゆえ。ゆえ。ゆえ。又

一説。ゆえ。ゆえ。ゆえ。ゆえ。ゆえ。ゆえ。ゆえ。

ゆえ。ゆえ。ゆえ。ゆえ。ゆえ。ゆえ。ゆえ。

中納言兼輔

みかの原
わきてながるる
いづみ川
いつみきとてか
こひしかるらん

中ノ二

源宗于　一品式部卿　本康親王一男寛平六年
正四位下に云　又三光院殿の説
光孝天皇――是忠親王――宗于
但両説共ニ王代ノ系圖ニナシ　如何

▲古今集第六冬　歌詞なし。冬のくれてよめる
しらぬひ　筑紫の山里の　さびしきは　雪ふる時　人も来ぬかな

山里は　冬ぞさびしさ　まさりける　人目も草も　かれぬと思へば

▲古今集第四秋の上　詞なし　よろづよのあきの月をよめる
しるべ　玄旨云　しるべ　神代人皇　頭　ぶぐ　ハ　ちりそ
ハ　せ　ちりそ　云　ぶ　行れ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
も共に　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ

壬生忠峯　右兵衛　府生木工允忠衡子
右馬門　府生内舎人　定外膳部

物語大目

○壬生　みぶとをとこそとものべ

▲古今集第十三恋の三　よみ人しらず　題不知

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

是則　大内記従五位下加賀介正書所ノ祭り

坂上田村丸――廣野――當常――好蔭

是則　後撰位者五人内

▲古今集才六冬部。詞云。大和のゝ国にまうでつかうまつりけるに。あるじのおとこ。朝臣。朝朗。明旦。云伝れしわさらけと。後に。是則。そいとねんごろなりける。月をよみてつかはしける。

坂上是則

わさらはの
月を見
ては
ふる里に
ねもこそ
しらめ

中ノ五

川樹　従五位下　雅楽頭　新名宿禰一男

文章博士　正六位上　壹岐守　出雲守

▲古今集才五秋部下。詞云。志賀の山ごえにて。あるじ。物とりて。神中物十七云。頭服云。流水のゝ上にて。川の滝のもとにて。あるじの男。歌。志賀の山ごえにて。あるじ。男。歌。

春道列樹

山川は風の
かけたる
しがらみは
流れもあへぬ
もみちなりけり

紀友則　或ハ長谷雄ノ弟

光孝皇子―斉太忠信命　公命ヨリ十九代ノ後

梶長　中納言　良道―本道　望行　義親人

名虎―有常　有友

友則　古今集撰者内

女子

貫之―時文

宗庶　女子

行廣―勝延

義均

或説ニ長谷雄ノ弟ニ改有明

紀友則

久かたの
ひかりのどけ
き春の日に
しづこころなく
花のちるらん

わるゝ花ハなかれてちりけるあのかもなかいつ
ゝ山の下にさて何ゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
もふゝりかなきゝ光あるゝゝゝゝゝゝ花のかゝや
ゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ

奥風　或説下総信濃守　正六位上　治部少輔
磨――濱成――禰谷――道成

奥風

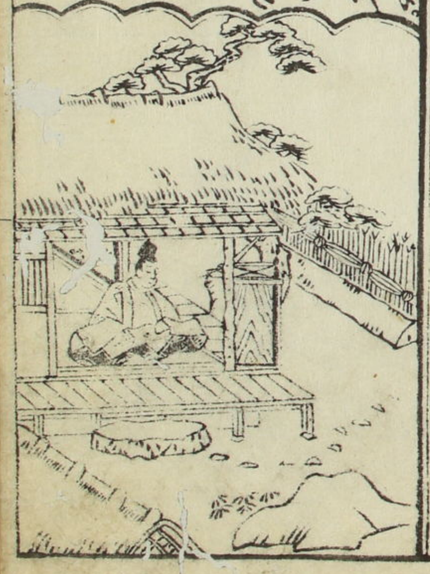
▲古今集才十七雜上　題しらず　そのうたハ
老ぬるなにおうるうたなりけりわれ
しつのをだまきくりかへしむかしの
ものがたりするもなをうつせみ
の世にいとなつかしきことのは
なりけりこれを聞人もあはれと
思ふ物のねにそなきぬるかれ
ぬるなにおうるうたなりけりわれ
も

深養父　従五位下内匠允　蔵人所　雑色
先祖不見　一説豊前守　序則男　一説筑前守
海雄孫房則子

一古今集才三首　詞書に月の西の方にありける時
よめるとあるのみ　ひさしくなりぬ　月の入るを
かくなん　月をよしとやらんとて　月の入るを
惜しむ心にかなはぬ　ものとて　月の入るを
とみどりきこえをみる　長夜の月　月をもて
明方に　入るもあり　くもりなく　月の入
るを　月の入るを　月の入るを　月の入るを
とかれ　月の入るを　月の入るを　月の入
やらんとて　月の入るを　月の入るを　月の入
るを　月の入るを　月の入るを　月の入
るを　月の入るを　月の入るを　月の入
るを

右近　右近少将　藤季綱ノ女　此季綱号交野少将

参議等



等　義懐等　左中弁　助解由左官　天暦五年

三月十日薨　七十二才

嘆峨天皇——弘——希

等　頭三天正四　左大弁　四位下　済

平兼盛　従五位　駿河守

光孝天皇――是忠親王――與雅王――兼盛――赤染門

後撰集ニハ兼盛王トアリ。歌双紙ニ天暦ノ比ヨリ年雄ニカヘルヨシアリ

〈拾遺集云（天徳の歌合のあしたあるいは）

し守宮如親防意如城と冨鄭玄の詩ぶれい

ほかつ――と思ふとくしもちひらにわれば

よわくなりて習なるに人のえらばれてゆめ――

ゆめ――云ひしかなかくしされば我なげ――さ猛まらせ

ふわ――とうとうちみけくなく家出すれよ年月ふるに

下にりそをさるし云のてろなるゆくよやうられつこ無と人

ようられてかよろきしろくそりろに出るクわ――

て物ものよりうしくなりろく狩しる我こ中院女氏

はもしし物は源の別れてしもくまるれ――

かりまい無ろしてまりのようるきまい物――ともひしーむと

ひーきとろぬかりて無れば物もちもとろろ人をふ

忠見　本名忠實　忠岑子　天徳二年　任摂津大目

〈同集に同歌合のあし。紅葉のちりつゞひるあし。

我あのまでき立にくりとん。我くあもちとろすきそ

称いひ岑ろまくぞ。ぞろ人をれどをろとぞるけまし

くもくのろりてれに立ろるうぞぞっしりひそろ。

まろきハまきみんつしすいれりれ宇もくぞりひさぞ

ろきい世のぞし宇狩ハ奥のあハか落ろりるもと長

ろり。源あ一体ろハ花葉のあとほろろりぞあもかそ

葉のあに同――ろとさま秀ろるれしそひの源物

なろろ言あいきろくく比もぞしぞ和――ろハりま

ていかり――法ていろぞ――ぞろ――の字でれ家物

所ぞ天徳のはあ会の時義盛忠見たれにつひそろ。和歌

物とあろそ忠見秀あろ――ろとひて兼盛いいで

見物のあろぞ――ろ――ろ――ハ物法ろはあろて

判せれろに兼盛あに――ろ――ろに物ろり――ろ――ろ秀あ

――ろれ――ぞの文ぬろぞ――く天気と仮ひりろ――ぞ門

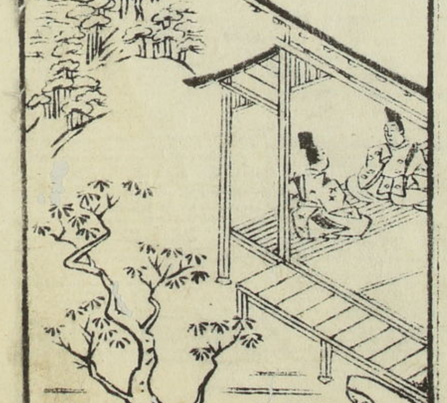
兼盛ろあと――ろ三題徴ろかは――ろろ――ろ物天気た

ていろ――ろて兼盛勝ろろ忠見それろひひろぞ

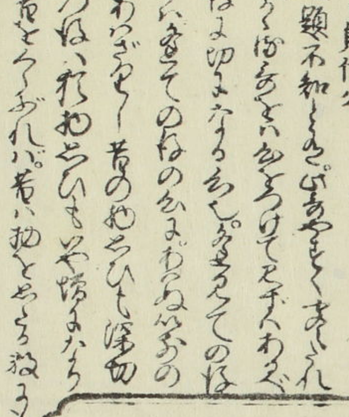
合の時ろ――ろ――ろ――

清原元輔　肥後守従五位上　深養父孫
兼光ノ聟　男也　妻ハ筑前守　高向利生女

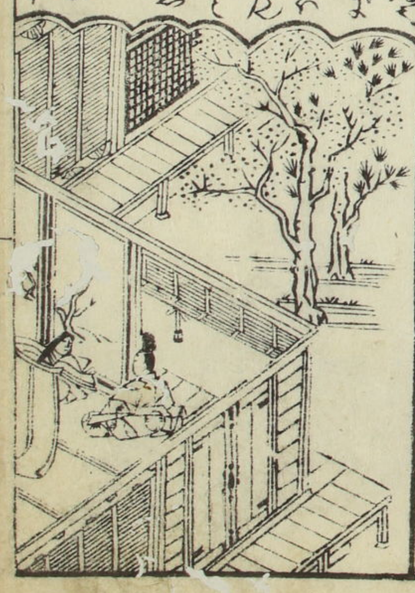
後拾遺ノ五首ニ出タル歌ハ出ヨミ給ヒテ作リ給フ女ニ
いうりてとゝかゝるこゝハ不ニ
ゆゑ物語ニ書ル松山波越ハ
ゆゑ物語ニ書ル松山波越ハ
ゆゑ物語ニ書ル松山波越ハ



敦忠　時平公三男　母ハ筑前守在原棟梁女ニ　敦忠ノ母
兼光ハ国経ノ宮ニ後ニ時平ニ嫁ス是故ニ敦忠ハ實ハ国経
ノ子ニ



人倫遠集第十二恋二類不知しのぶ恋ハ
ともも公ハ
うゝぞ公ハ
の御よりぶれ
ぶれ
ものを
おもふ
さわぎ



朝忠　従三位中納言号二土御門中納言一　右京
門督
良門
高藤　内大臣
定國　泉大将
定方　三条右大臣
朝忠
朝頼

三条右大臣定方二男なり中納言山蔭女

八拾遺集云　詞云よ。天暦の御時に歌合
あるとき　これは是不審　歌の心ゆかず　ゆかずとは
人を不甘心　ゆかずとは　のしなり字は助語し
けり

世中にそえて　榊のなりわせいなるの心はの心
うつ　とあるの心ひとし。榊とは　榊　すなわち
榊のなりわせは　歌の心はのごとけ　まし
ふるもいつわりなく　世の　深切なるうわ　是
さてしかくいと　云　是　のあるなり　ひなる
ひとわくは　中絶　本れば　いつわりなく　人
わろ　もいとでく　思わざる　人　ありひそかなる
ぶく　我　もいつわりなれば　只　世なるよ　是　云

中納言朝忠

あふことの
なきものとは
中くれ
人をも
うらみじ
とは

中ノ十二

なくは中絶くとうのもわるべうぞるの程みまは人をも
いのなるいうつきなく　是　のやなるゆま絶てなくはとにわるも　中絶もるる
のわはいとひもそひうもおまるとも　中くとは云わんうう　中くとは云はいく行てとは云
なるは同しあるの絶てしなくはいうる　云なし　平常縁云　ぞうんのるまは云
うるは曲なるきこういつうえうんはとしきとも　中くとうは　さはいうねさ　歌あるりは
いうるはあるしやくもべしとは云　宇抵云は云　とはいうてはわくれいうあもしとはいはも人
はつれなくして年月をるにつうして　なるは　風さうに　なる人の又たえそそやんうる
なきとはのわるわはうちをしうえそしなくはばくよとは云　又一説は　ろうは云
是まりしきはなるとうはれくはなるとはの切なれば中くはくはのは是すの
絶てなくはくうもわうしはも。
大和物語曰。わきうぐの中納人の素はてをうる人はまのひて是わはわ　ろうは
ひうはてすとくるなるは。の男人の歌のるまはうはてくるとくれは是もはれて
わるれはとひをわはそうはてつうはける
しうぐへ　なる　歌うはう　とはうあしてはうる
とはん下はとくるはいひわるる

謙徳公　一条摂政伊尹公　九条右丞相師輔公一男母　武蔵守経邦女　天禄三十二薨　三十九才

此公後撰集を撰ませ給ふ　和歌の名人

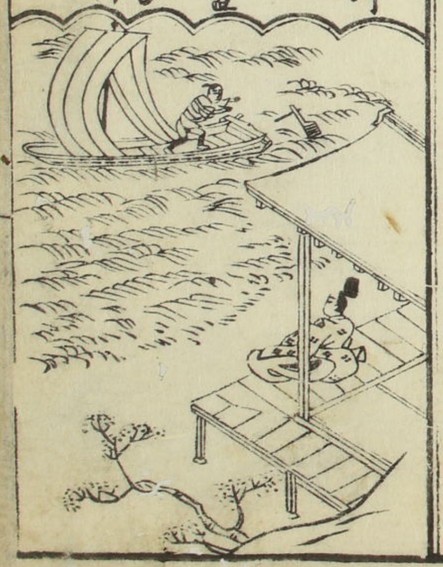
謙徳公は諸芸に太政大臣の官にて薨ずる人必至る一図に対せらる　紀中古以来尊く必薨ずるの付　辞退もなし

好忠　先祖不見

寛和の比の人　任丹波掾　仍て号曽丹

▲新古今集才二首　拾遺集才十九首　五詩人

わが世の比の人　紀人　紀貫之

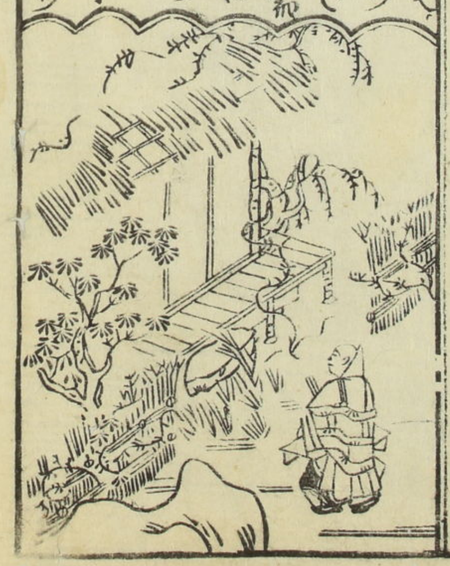


惠慶　先祖のことば　寛和のはの人なり

播磨講師家集を

○法師　わつしゝとゝびうどやうゝとゝしく

△拾遺集第十三秋部に河原院にてあれにしやどとよ秋来ときゝ人こゝろ物のそらなるとゝのこゑ紙に何はまて人の問ふきこゝろ物はとゝ人ゝ難のかゝの業も苦のやゝ苦もとゝしあ秋のこゝろ所をわすれしこゝろわゝるさ風たこゝひやうくやうくゝ河原院の花をたゝひつゝけて此あとゝ人の人きゝすとゝ三光院は流に公八を蔵のとゝて人わゝもかゝとゝ和ゝ八秋と来ゝまゝきすとゝ山上と三きゝふゝるゝあし八を蔵のゝゝてゝる所八人の人ゝくゝゝもさひゝゝゝくゝきゝ人ゝうげゝ人ゝゝとゝて時句あゝびゝゝ



326